

SPI（言語）から考える大学生の国語力

重 田 美 咲¹
中 原 郷 子²

目 次

1. はじめに
2. 調査の概要
3. 調査の結果と考察
 - 3-1 全体的な正答率から
 - 3-2 分野別正答率から
 - 3-3 各分野の正答率と全体の正答率の相関から
 - 3-4 正答率の低い問題の内訳
 - 3-5 初等・中等教育段階での課題と比較して
 - 3-6 AI社会を生き抜くために
4. まとめ

1. はじめに

SPIは就職活動の際に日本で最も採用されている検査の一つであり、2018年度の年間利用社数は13,200社、受検者数は202万人となっている¹⁾。性格検査と能力検査があり、能力検査は言語分野（国語）と非言語分野（数学）に分かれる。一般的に、採用までの過程の初期の段階で用いられることが多く、SPIで企業の求める点数に達していなければ、面接等の次の段階に進むことはできない。大学生が高校卒業前に大学入学センター試験（以下、センター試験）をはじめとする大学入学試験を受け、大学に入学してきたように、大半の日本の大学生が大学在籍中にSPIをはじめとする就職試験を受け、卒業していく。言うまでもなく就職は人生において非常に大きな選択、決定となる。望み通りの就職を叶える手段として大学を選んで入学してくる学生もいる。そして、当然ながら、学生の夢が叶うことを望まない教員はいないが、授業の欠席や卒業研究の遅れ等を理由に就職活動が大学教育に与える影響に眉

をひそめる教員も多い。大学において、就職試験のための勉強と大学での勉強は別次元のものだと考えられる傾向がある。採用試験の模擬試験は過半数の大学・短大で行われているものの、多くの大学・短大では正課の授業時間外に行われる²⁾。また、SPIと大学教育に関連する先行研究を見ると、SPIの非言語分野（数学）を扱ったものが多く³⁾⁻⁵⁾、言語分野を扱った先行研究は殆ど見られない。言語分野を扱ったものは、主に日本語を母語としない留学生のための研究である^{6),7)}。「数学」が大学での教養科目として存在し、数学のリメディアル教育にSPIの非言語問題の活用があるのに対し、「国語」は大学では国語学や国文学といった科目でしか存在しないことや国語のリメディアル教育といえばレポート・論文作成や発表・議論のための能力といった大学生活で必須の能力育成を目指すのが一般的であることから、このような現状になっていると考えられる。本稿では、これまで大学教育研究において取り上げられることが殆どなかったSPIの言語問題を取り上げ、日本語を母語とする大学生の解答傾向を分析することで、大学生の国語力の課題を明らかにし、大学で身につけるべき国語力とは何なのか、SPI（言語）を大学教育においてどう位置づけるべきかについて考えていく。

2. 調査の概要

日本語を母語とする大学2年生33名に対し、『これが本当のSPI3だ！（2016年度版）』⁸⁾の言語問題を解くことを依頼した。一定数のデータを得るため、2015年4月、2016年10月の2回にわたり調査

1 下関市立大学

2 長崎外国語大学

表1 問題の構成

問題の種類	問題番号
二語関係 (最初に示された二語の関係と同じ関係のものを選ぶ)	問1～問12
熟語の意味 (最初に示されたことばと最も意味に近いものを選ぶ)	問1～問12
熟語の成り立ち (漢字二字からなる熟語の相互の漢字の関係として適切なものを選ぶ)	問1(1)～(5)、問2(1)～(5)
語句の用法 (最初に示されたものと最も近い意味で使われているものを選ぶ)	問1～問12
文の並べ換え (文節または文章を意味が通るように並べ替える)	問1、問2、問3(1)、(2)
空欄補充 (文章中の空欄を埋める)	問1、問2①、②、③、問3ア、イ、ウ、問4
長文読解 (内容理解を問う選択肢のある問題が中心だが、接続詞や指示詞に関する問題、空欄を埋める問題、一文を文章中に挿入する問題もある)	問題1：問1、問2、問3 問題2：問1 問題3：問1、問2、問3 問題4：問1、問2、問3、問4、問5

を行い、2015年に10名、2016年に23人の調査協力者を得た。まず、大学2年生を対象とした理由は、SPIの対策を始める前の段階でどの程度問題が解けるかを知りたかったからである。そして、1年生でなく2年生を選んだのは、大学入学前の学習経験だけでなく、大学入学後の学習、教育、生活の影響も含めて考えたからである。また、『これが本当のSPI3だ!』を用いたのは、高い精度で問題を再現していること、主要3方式^{注1)}に対応していること、SPI対策をこれから始める学生向けにつくられていること、毎年よく売れていることが挙げられる。調査に用いた問題は、表1の七つのタイプで構成されており、語彙と長文読解の二つに分けた古本⁶⁾より細かく分析できると判断した。実際の調査では印刷された問題用紙に答えを書き込む形式を採り、制限時間は設けなかった。なお、調査協力者は、日本の受験生向け難易度ランキングで中程度とされ、就職に強いと言われるある大学（以下、A大学）の経済学部の学生である。

3. 調査の結果と考察

3-1 全体的な正答率から

表2に正答率の分布を示す。一般的に企業はSPIの得点に関して採用基準を公表しておらず、企業によって異なるとも考えられるが、ボーダーラインは正答率70%程度なのではないかと言われている。受験生向け難易度ランキングで中程度とされているA

大学経済学部において、対策を始める前の2年生の段階でボーダーラインとされる70%を超えている学生は33名中11名で調査協力者の3分の1を占める。3分の2の学生が70%を超えていないのだが、正答率60%から70%の層が最も多く、これらの学生は少し対策をとることで70%を超えることも難しくないのであると思われる。

SPIを開発したリクルートは、検査を受けることに対する「慣れ」や、検査形式・問題形式に対する「慣れ」、またそれらのことによる回答所要時間の短縮などの影響により、複数回受検した際にやや得点が高くなる傾向があるとしているものの、対策本を利用した短期的な事前学習は得点にはほとんど影響がないとしている⁹⁾。これは、1回目の受検後に対策本を渡し1週間勉強をさせた40人と対策等の指示をしなかった40人に1週間後に再度受検させた実験結果に基づいている。しかしながら、長期的な事前学習の効果の検証はなされていない。例えば、1年、1年半、それ以上、ありとあらゆる様々な対策本を、夢を叶えるために必死になってやった場合等はどうなるのであろうか。本稿では、それについて

表2 正答率の分布

正答率		人数
以上	未満	
～ 0.6		3
0.6 ～ 0.7		19
0.7 ～ 0.8		10
0.8 ～		1
計		33

ての証明はできないが、A大学の就職率が毎年約99%であることを考えると、留年や退学が一定数あったとしても、2年次から就職活動時までにSPIの得点が上がっている可能性を否定できない。勿論、これがリクルートの言う「慣れ」の効果である可能性もあるし、A大学の学生たちがボーダーラインを低めに設定している企業に入っている可能性もある。いずれにせよ、練習問題も全くやらずにSPIを受けに行く学生は殆どいないであろう。SPI（言語）の得点を上げるためだけでなく、SPI受検という機会を大学生の国語力の向上に活用するという方向で大学生活・大学教育に位置付けていくことが望ましいのではないだろうか。

3-2 分野別正答率から

問題の種類別の正答率と標準偏差を表3に示す。

それぞれの問題の種類で正答率の差が統計的に有意であるか否かを検討するため、正解数から正答率を算出し、それを角変換した値を用いて、問題の種類を独立変数、正答率を従属変数とした1要因分散分析を行なった結果（本研究では有意水準を5%に設定した）、問題の種類の主効果が有意であった（ $F(6, 192)=21.51, p<.001, \eta^2=.35$ ）。多重比較を行なったところ、有意差がみられたペアの一覧を表4に示す。

多重比較の結果から、二語関係は語句の成り立ち、空欄補充より正答率が低いこと、熟語の意味は熟語

表3 平均正答率（M）と標準偏差（SD）

	調査協力者（n=33）	
	M	SD
二語関係	0.58	0.12
熟語の意味	0.50	0.18
熟語の成り立ち	0.87	0.14
語句の用法	0.66	0.14
文の並べ換え	0.69	0.20
空欄補充	0.79	0.20
長文読解	0.69	0.14

の成り立ち、語句の用法、文の並べ替え、空欄補充、長文読解より正答率が低いこと、熟語の成り立ちは語句の用法、文の並べ替え、長文読解より正答率が高いこと、語句の用法は空欄補充より正答率が低いこと、文の並べ替えは空欄補充より正答率が低いこと、空欄補充は長文読解より正答率が高いことが明らかになった。表3を見ると、最も正答率が低いのは熟語の意味であり、二語関係、語句の用法と続くことがわかる。これらのことから、熟語や語句、語彙力といった点に大学生の国語力の課題があるのではないかと考えられる。同じ熟語を扱った問題でも熟語の成り立ちは分野別で最も正答率が高いが、熟語の成り立ちは漢字2字からなる熟語の単漢字同士の関係を分析するだけでよいから、漢字の知識を持っていれば正答しやすい問題であると言える。二語関係で呈示されている語句の関係を判断するためには、語彙そのものについての知識が必要だけでなく、その関係を分析するメタ的な知識も必要となる

表4 多重比較結果一覧

		t 値	ポイント差 ^a	効果量
二語関係	語句の成り立ち	7.81****	-23.48	r=.49
	空欄補充	5.95****	-17.89	r=.40
熟語の意味	熟語の成り立ち	9.48****	-28.53	r=.57
	語句の用法	3.26***	-9.82	r=.23
	文の並べ替え	4.42****	-13.29	r=.30
	空欄補充	7.63****	-22.94	r=.48
	長文読解	3.91****	-11.75	r=.27
熟語の成り立ち	語句の用法	6.22****	18.71	r=.41
	文の並べ替え	5.07****	15.24	r=.34
	長文読解	5.58****	16.78	r=.37
語句の用法	空欄補充	4.36****	-13.12	r=.30
文の並べ替え	空欄補充	3.21***	-9.65	r=.23
空欄補充	長文読解	3.72****	11.19	r=.26

a. 左の項目から右の項目を引いた値

*** $p<.005$, **** $p<.001$

ため、同じく熟語が対象となっている熟語の成り立ちより難易度は高く、必要となる知識も高度であると考えられる。最も正答率が低かった熟語の意味は、定義文を読んで、その内容を言い換えた語を選択する問題であるが、選択肢には複数の類義語が含まれており、正確な語彙の知識がなければ正答するのが難しい。また、使用語彙が他の設問に比べ、やや非日常的な語彙であり、調査協力者にとって語彙に対する親密度はそれほど高くはないことが推測されるため、正答率がそれほど高くはない結果になったと考えられる。

3-3 各分野の正答率と全体の正答率の相関から

各分野の正答率および全体の正答率との相関係数を表5に示す。表5から、明らかになったのは次の9点である。すなわち、a) 二語関係と全体の正答率には中程度の相関があること、b) 熟語の意味と全体の正答率には中程度の相関があること、c) 熟語の成り立ちと全体の正答率には中程度の相関があること、d) 語句の用法と全体の正答率には弱い相関があること、e) 長文読解と全体の正答率には中程度の相関があること、f) 二語関係と熟語の意味の正答率には中程度の相関がある傾向があること、g) 二語関係と熟語の成り立ちの正答率には中程度の相関がある傾向があること、h) 熟語の成り立ちと長文読解の正答率には中程度の相関がある傾向があること、i) 空欄補充と全体の正答率には中程度の相関がある傾向があることが明らかになった。

上記の結果 b)、c)、e) より、全体の正答率は熟語の意味、熟語の成り立ち、長文読解と関連があることが示された。すなわち、語彙の知識があるか否か、また長文を読み解く力があるか否かと、全体的な得点には関連があることが示唆された。

3-4 正答率の低い問題の内訳

さらに、正答率の低い問題を一問ずつ分析していく。それぞれの分野において正答率の高い問題、低い問題がどのように分布しているかを表6に示す。また、一つ一つの問題の正答率は資料に示す。

熟語の成り立ちでは正答率70%未満の問題は見られず、空欄補充では正答率が50%未満の問題は見られず、文の並べ替えでは正答率70%未満の問題は1問のみであったことから、これらの分野に関する知識・技能はA大学の2年生の多くが既に身につけているものと考えられる。

二語関係、熟語の意味では正答率の高い問題から低い問題まで幅広く分布しているが、他の分野に比べて正答率が低い問題が多いことから、語彙力に課題があると考えられる。熟語の意味で特に正答率が低かったものは「垂流 (0.09)」、「いみじくも (0.12)」、「陳腐 (0.18)」といったものであった。二語関係で特に正答率が低いのは「庭：造園」が「寺院：建立」と同じ関係だと見分けるもの (0.18)、「暗室：現像」が「プロペラ：推進」と同じ関係だと見分けるもの (0.21) であった。日常生活の話し言葉にはなかなか現れない熟語である。語句の用法では、文中の語 (名詞、助詞、助動詞など) の意味を分析し、同じ用法のものを選択するが、最も正答率が低かったのは助詞「に」に関する問題 (0.15) で、次いで正答率が低いのも助詞「で」に関する問題 (0.33) であった。読解で正答率が低かったのは、350字程度の抽象的な文章とそれを50字程度に要約したものがあり、要約文の中の空欄を埋めるものであった。選択肢のある問題ではなく自分で答えとなる語句を本文中から見つけ出さなければならない。読解力も重要であるが、語彙力も軽視できない。次いで正答率の低い読解問題もやはり選択問題ではな

表5 項目の正答率同士の相関係数

	二語関係	熟語の意味	熟語の成り立ち	語句の用法	文の並べ替え	空欄補充	長文読解
熟語の意味	.311 ⁺						
熟語の成り立ち	.326 ⁺	.192					
語句の用法	-.026	-.061	.081				
文の並べ替え	-.027	.123	.101	.147			
空欄補充	-.259	.183	-.219	.035	-.033		
長文読解	.000	.186	.333 ⁺	.063	-.134	.137	
全体	.411 [*]	.687 ^{**}	.536 ^{**}	.375 [*]	.221	.311 ⁺	.552 ^{**}

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表6 正答率別問題の内訳

正答率	二語関係	熟語の意味	熟語の成り立ち	語句の用法	文の並べ替え	空欄補充	長文読解
以上 未満 ~ 0.1	0	1	0	0	0	0	0
0.1 ~ 0.2	1	2	0	1	1	0	1
0.2 ~ 0.3	1	0	0	0	0	0	0
0.3 ~ 0.4	3	1	0	2	0	0	0
0.4 ~ 0.5	0	1	0	0	0	0	3
0.5 ~ 0.6	1	3	0	1	0	2	0
0.6 ~ 0.7	1	2	0	2	0	1	1
0.7 ~ 0.8	2	0	3	2	1	1	2
0.8 ~ 0.9	2	1	3	1	1	1	3
0.9 ~ 1.0	1	1	4	3	1	3	2
計 (問題数)	12	12	10	12	4	8	12

く、空欄に入る語句を文中から抜き出す問題であった。因みに前者のテーマは思想、後者のテーマは進化であり、調査協力者が所属する経済学部では普段、このような文章に触れることはない。文の並べ替えで正答率が低かったのも漁業における科学技術の発達に関する文を並べ替えて文章を完成させる問題であった。

3-5 初等・中等教育段階での課題と比較して

本調査の結果から、大学生の国語力の課題は語彙力、文法（助詞）、抽象的な文章や自分に馴染みのない文章の読解にあると考えられ、SPIの得点を上げるにも語彙力や読解力が鍵となるようである。大学でもこれらの点に留意した指導を日々行っていくことが望ましいであろう。実は、語彙力と読解力が課題とされるのは大学生だけではない。日本における初等教育・中等教育の基準を示すものとして学習指導要領がある。学習指導要領の改訂は成果や課題をもとに10年ごとに行われるが、最近では2018年3月30日に行われている。この改訂の趣旨や要点に着目すれば、ここ10年間の初等・中等教育の国語教育の課題が分かる。課題として挙げられていたのは、PISA2015で読解力の平均得点が下がったこと（コンピュータ上でのテストへの不慣れも理由とされる）、小学生では、文における主語をとらえることや文の構成を理解したり表現の工夫をとらえたりすること、目的に応じて文章を要約したり複数の情報に関連付けて理解を深めたりすること、中学校では、伝えたい内容や自分の考えについて根拠を明確にして書いたり話したりすることや複数の資料から適切な情報を得てそれらを比較したり関連付けたりすること、文章を読んで根拠の明確さや論理の展

開、表現の仕方等について評価することが課題となっている。高等学校では、主体的な言語活動が軽視されていること、文章の内容や表現の仕方を評価し、目的に応じて適切に活用すること、多様なメディアから読み取ったことを踏まえて自分の考えを根拠に基づいて的確に表現すること、国語の語彙の構造や特徴を理解すること、古典に対する学習意欲が低いことなどが課題となっている。そして、「学習内容の改善・充実」として、①語彙指導の改善・充実、②情報の扱い方に関する指導の改善・充実、③学習過程の明確化、「考えの形成」の重視、探究的な学びの重視、④我が国の言語文化に関する指導の改善・充実、⑤「話すこと・聞くこと」及び「書くこと」に関する指導の改善・充実が挙げられ、別の項目として「読書指導の改善、課題」についても述べられている¹⁰⁾。

ここでも、今回の調査と同様に「語彙」「読解」という語が目につく。読解に関しては、小学生から課題となっている。高校でも語彙の構造や特徴を理解することが課題となっており、小学生から語彙を豊かにする指導の改善・充実を図っている。読書指導も初等・中等教育において改善・充実が必要とされている。ここから、初等・中等教育段階での課題が大学に持ち越されている可能性と初等・中等教育段階での成果と課題を踏まえた連続性を持つ国語力の育成が求められることが指摘できる。

今回の学習指導要領の改定は、大学入学試験改定という背景もあり、高大接続という点にも重点が置かれている。そして、従来以上に、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」に力が入れている点からも、大学で求められるレポート・論文作成、発表・議論といった技能を入学時には既に備えていること

も期待できる。しかしながら、大学では近年の初年次教育やリメディアル教育の経験の蓄積もでき、議論・討論、レポート作成といった能力を伸ばすノウハウを持つ大学、教員も多い。一方で、大学では所謂「国語」の授業はない。確かに「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の能力を高めることも大事ではあるが、それ以上に優先されるべきことは、初等・中等教育段階での語彙力や読解力に関する課題を大学に持ち越さないことではないだろうか。今後、大学入学前の教育課程で「話すこと・聞くこと」、「書くこと」により力が入られることで、語彙力、読解力、読書習慣に関する課題が大学においてより深刻になることも懸念される。

3-6 AI 社会を生き抜くために

大学卒業前に次なるステップである就職に向けて受ける試験としてはSPIが存在するが、大学入学前に受ける試験としてセンター試験が存在する。大学入学試験改定が議論されているが、現状では国公立をはじめとする多くの大学でセンター試験が利用されている。2018年度も全体で55万人弱の受験があり、国語では51万人超の受験があった¹¹⁾。「平成31年度 国語の出題方法」によると、『『国語総合』の内容を出題範囲とし、近代以降の文章、古典（古文、漢文）を出題する』とされている¹²⁾。例年、大問4問が出題され、第1問が現代文（評論）、第2問が現代文（小説）、第3問が古文、第4問が漢文である。「東ロボプロジェクト」は国立情報学研究所が2011年から始めたプロジェクトで、人工知能（以下、AI）が東京大学の入学試験にチャレンジするというものである。人工知能である「東ロボくん」はセンター試験対策も行っており、国語の模試の結果等も公表されている。SPI（言語）では、古文、漢文は出題されていないため、東ロボくんの現代文の得点を参考にしながら、SPI（言語）と大学生の国語力について考えていく。

東ロボくんの2016年の進研模試の現代文の成績は150点満点中80点で偏差値は49.2であった¹³⁾。第1問（評論）で34点を取っており、全国平均26.3点を上回っているが、第2問（小説）では21点で、全国平均29.0点を下回っている。漢字に関して言えば、東ロボくんは2013年・2014年・2015年・2016年の模試で全問正解、語句に関して言え

ば、2015年・2016年の模試で全問正解であった¹⁴⁾。漢字や語句の意味把握は完璧と言っていいのである。評論問題の傍線部を正しく説明したのを選ぶ設問も正解であった。傍線部前後の部分的な精読の問題はできるという。東ロボくんの誤答例として、同じような方向性の選択肢が並んでいる場合に筆者の主張を超えた極端な選択肢のほうを選んだものがある。そして、本文を俯瞰し、表現や構成・展開を本文の趣旨に照らして評価したり、筆者の叙述の意図をとらえたりする設問は苦手なようである。評論より小説で点数が取れず、登場人物の心情を正しく理解する問題も苦手だという。

新井は東ロボプロジェクトを通して、AIが今後労働力として人間のライバルとなり得ることを指摘し、人間にしかできないことを考え、実行に移していくことが生き延びるための唯一の道であると述べている¹⁵⁾。そして、人間がロボットに勝る代表的な能力として読解力があるとも述べている。しかし、現在では、この読解力が低く、教科書が読めない子どもが多いことに警鐘を鳴らしている。国語の模試に関して言えば、漢字や語句の意味把握ではAIが人間と同等かそれ以上の点数を取ることが分かる。一方で全体的な俯瞰や筆者の意図、本文の趣旨に照らした表現や構成展開の評価、筆者の意図や登場人物の心情理解は、人間にしかできない技能、活動と言えよう。大学卒業後、AIに負けずに社会で生き延びられる学生を育てていくために、大学でもこのような人間特有の国語力の育成に力を入れていくべきではないだろうか。現状では、一般的にSPIの長文問題はセンター試験の長文問題より短く、小説を素材にしたような問題が頻出されることもない。エントリーシート、面接、小論文等で、上記のような人間特有の国語力は測られているのかもしれないが、SPIにもこのような人間特有の能力を測る問題が積極的に出されるようになれば、大学生は高いモチベーションで対策を行い、結果として、今後AI化が益々進む社会で生き抜くための能力も高まっていくのではないかと思われる。

4. まとめ

A 大学での調査の結果から、大学生の国語力の課題は語彙力、文法（助詞）、抽象的な文章や自分に

馴染みのない文章の読解にあることが明らかになった。SPI の得点を上げるにも語彙力や読解力が鍵となるようである。この語彙力、読解力という大学生にとっての課題は、初等・中等教育段階から持ち越された可能性があり、初等・中等教育段階での国語教育との連続性を意識しながら大学でも国語力を育成していくことが必要であろう。今後、初等・中等教育段階での国語教育において「話すこと・聞くこと」、「書くこと」により力が入れられ、語彙力、読解力に関する課題が大学においてより深刻化することも懸念される。さらに、AI 社会を生き抜くためには、人間特有の国語力を伸ばすことも重要かと思われる。

もちろん、SPI（言語）でも、個人によって得手不得手な分野は異なり、各自が不得意な部分を明らかにした上で、苦手分野を克服していくといった個別の取り組みは欠かせない。一方で、大学側は上述の現状を踏まえ、SPI 受験という機会を活かす、以下のような点に留意した教育を行うことができるのではないだろうか。主に、語彙力の強化、助詞の意味の理解、専門分野に偏らない読書の機会の確保である。専門にかかわらずどの教員も、語彙力や助詞の指導は提出物の添削などを通して行うことができ、折に触れ、読書を勧めることもできるであろう。また、初年次教育や初期のキャリア教育で、語彙力の強化、助詞の意味の理解、専門分野に偏らない読書の機会の重要性を訴えていくのもよいのではないか。初年次教育の1コマを助詞の解説に当てるのもよいだろう。近年では初年次教育にビブリオバトルを行う大学も増えてきているが、このような機会に意識的に幅広い読書の重要性を学生側に認識させていくのも効果的であろう。しかし、日常生活の中で自然に語彙力を強化していくことや長期的に自分の専門や興味に関係なく本を読み続けることは容易なことではない。そうであるならば、逆に SPI の問題に取り組むことで、自分の専門以外の分野の文章を読み、語彙を増やし、知識の幅を広げていくのも効果的な方法の一つではないだろうか。SPI の練習問題は短時間でできるため、毎日1題ずつといった習慣にもしやすい。また、就職につながるため、取り組む際のモチベーションも高い。読むことが苦にならなくなり、興味が広がり深まれば、SPI の練習問題の出典をたどり、その本を一冊読むことにつ

ながる可能性もある。読解問題に取り組むうちに語彙力も高まると考えられるが、語彙に関連する問題に取り組むことで一層語彙力もついてくると考えられる。そのためには、初年次教育や初期のキャリア教育において SPI をはじめとする就職試験の存在と内容を周知し、練習問題に取り組ませるきっかけを提供することが重要であろう。SPI の問題に初年次から取り組むことは、就職を睨んで大学に入学した学生にとっても、不本意入学の学生にとっても、有意義な大学生活に向けて踏み出す機会にもなると思われる。さらに、このような国語力が伸びることで、大学において求められるレポート・論文作成や発表・議論の能力が高まることも期待できる。

大学においては、大学の勉強と就職試験の勉強は別だという固定観念を捨て、学生の国語力、生きる力を伸ばすために、SPI、就職活動という機会をも積極的に活用していくべきなのではないだろうか。

謝辞

『これが本当の SPI 3 だ!』の使用を許可してくださった株式会社洋泉社様、SPI ノートの会様、津田秀樹様に心から感謝の意を表します。

注

- 1 主要3方式とは、専用会場のパソコンで受験する「テストセンター」、自宅のパソコンで受験する「WEB テスティング」、企業内等で受験する「ペーパーテスト」で、方式によって出題範囲も異なる⁸⁾。

主要参考文献

- 1) リクルート「SPI 3 リクルートの適性検査 SPI 3」
<https://www.spi.recruit.co.jp>
- 2) 二宮祐 (2016)「大学における採用テスト対策の現状：「SPI 対策」についての調査から」『高等教育ジャーナル：高等教育と生涯学習』23、pp.23-33.
- 3) 樋口勝一 (2019)「基盤教育科目「数的処理の基礎」の授業改善報告1」『追手門学院大学 基盤教育論集』第6号、pp.139-147.
- 4) 原田康平 (2015)「Web を利用した SPI 学習システムの試作」『久留米大学コンピュータジャーナル』第29巻、pp.41-51.
- 5) 津森伸一 (2014)「リメディアル数学学習システムを用いた入学前教育の実施と評価」『近畿大学九州短期大学研究紀要』44、pp.23-35.
- 6) 古本裕子 (2010)「日本企業への就職を目指す留学生の直面する問題について一模擬試験問題から推測す

- る筆記試験 SPI の難しさー』『名古屋学院大学論集・言語・文化篇』第 22 巻第 1 号、pp.83-96.
- 7) 重田美咲・中原郷子 (2017) 「中国人学部留学生の SPI の解答の傾向」『専門日本語教育研究』19、pp. 63-68.
- 8) SPI ノートの会・津田秀樹編著 (2014) 『これが本当の SPI 3 だ！ 2016 年度版 主要 3 方式<テストセンター・ペーパー・WEB テスティング>対応』洋泉社
- 9) リクルート「SPI のよくある誤解」
<https://faq.trueteller.net/recruit/spi/faq/result.asp?Option=0&NodeID=5129&DispNodeID=5126&CID=0&Text=&Field=0&KW=0&KWAnd=1&Attrs=&Bind=FALSE&SearchID=&Page=&Rows=&NB=>
- 10) 文部科学省「高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説 平成 30 年 7 月」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/28/1407073_02_1_1.pdf
- 11) 大学入試センター「平成 31 年度大学入試センター試験実施結果の概要」
<https://www.dnc.ac.jp/albums/abm.php?f=abm00035843.pdf&n=【試験情報】平成31年度大学入試センター試験実施結果の概要.pdf>
- 12) 大学入試センター「平成 31 年度大学入試センター試験出題教科・科目の出題方法等」
<https://www.dnc.ac.jp/albums/abm.php?f=abm00009660.pdf&n=平成31+年度大学入試センター試験出題教科・科目の出題方法等.pdf>
- 13) 新井紀子 (2018) 『改訂新版 ロボットは東大に入れるか』新曜社
- 14) 新井紀子・東中竜一郎編 (2018) 『人工知能プロジェクト「ロボットは東大に入れるか」第 3 次 AI ブームの到達点と限界』東京大学出版会
- 15) 新井紀子 (2018) 『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』東洋経済新報社

【資料】問題別正答率

一語関係	問 1	0.39	0.58	語句の成り立ち	問 1	(1)	0.79	0.87	文の並べ替え	問 1	0.85	0.69					
	問 2	0.21				(2)	1.00			問 2	0.76						
	問 3	0.67				(3)	0.85			問 3	(1)		0.15				
	問 4	0.33				(4)	0.82				(2)		1.00				
	問 5	0.88				(5)	0.73			問 1	0.58						
	問 6	0.79			問 2	(1)	0.94				問 2		①	1.00	0.79		
	問 7	0.88				(2)	1.00						②	0.97			
	問 8	0.79				(3)	0.76						③	0.97			
	問 9	0.94				(4)	0.85				問 3		ア	0.73			
	問 10	0.58				(5)	0.97			イ			0.64				
	問 11	0.36			0.66	語句の用法	問 1			0.39	0.66		空欄補充	ウ		0.58	0.69
	問 12	0.18					問 2			0.91				問 4		0.88	
熟語の意味	問 1	0.33	0.50	問 3			0.67	0.66	長文読解	問 1		1.00		0.69			
	問 2	0.12		問 4			0.33			問 2		0.97					
	問 3	0.91		問 5			0.70			問 3		0.85					
	問 4	0.48		問 6			0.85			問 1		0.15					
	問 5	0.82		問 7			0.55			問 1		0.48					
	問 6	0.09		問 8			0.73			問 2		0.45					
	問 7	0.18		問 9			0.79			問 3		0.73					
	問 8	0.70		問 10			0.94			問 1		0.82					
	問 9	0.58		問 11			0.15			問 2		0.88					
	問 10	0.67		問 12			0.91			問 3		0.79					
	問 11	0.55				問 4	0.67										
	問 12	0.55				問 5	0.48										
総正答率										0.54							